

# 「全カリ必修は立教基準」

小林 純

特色ある教育を。個性的な大学を目指せ。横並びでは良くない。資金は「ウリ」に向けて傾斜的に配分せよ。どこへいっても金太郎飴のごとく、同じようなことを耳にする。猫も杓子も「個性的」になりたいくらいに均質化が進んだということなのだろうか。さらに特色の中身が、これまた「使える英語」だとくれば、もう笑うしかない。病根は深そうだ。

百人に効く薬があるのなら、もうどこでも使っているはずだ。2、3人に効く薬を百人に投与したら、中には副作用をおこす人もあるにちがいない。なら本学は1万5千とおりの処方せんを背かねばならないのか。たぶんそうなのだろう。でも、それを「特色ある」とか「個性的な」とは言わないだろう。

学生をマスと見れば、一応のことは言える。昔ほどの学力はもはやない。部活とファッションと3科目の偏差値くらいにしか興味のない、世界にも稀な社会層たる高校生が入ってきている。親の背中を見ない世代である。対人コミュニケーションが恐ろしくまずい。望んでその学科を選択したのではない。—とまあ、否定的な印象は山ほど語られている。とはいえ百人は百通りの人生を歩んでいるのだから、まとめて印象を語ってもさほど意味はなからう。

必修とは、いわば立教スタンダードの設定である。英語はできてあたりまえ、多文化世界の住人には第2言語の初級程度は必須アイテムである—という基準。世の複合的現象を前に複数の切り口から考察することで、科学の意味を知り実践的思考を試す—という基準。世間で活躍するOBOG諸兄弟からは「そんなの誰だって皆やってますよ、仕事だもん」といわれそうなものだが、それが実に立派な基準なのだ。平々凡々な基準を地道に内実化すればいいのだ。全学生が同じレベルで受け止めるわけでもないし、同じ色に染まるわけでもない。世に名をなす方々で「大学中退」の称号をお持ちの人も多いことだし、基準をクリアしなくたって、生きていける。

全カリ科目が必修であるのは、立教の第1基準を定めたことを意味している。専門は第2基準だ。必修単位修得はいわば品質保証にあたる。で、その水準は、単位認定権者のサジ加減。「立教生ならこの程度かな」の感触、ここにかかっている。学生諸君は、実に特色ある個性的な仕方、この基準を満たしていけばいい。授業料はこの基準充足のための費用。2～3人に効く特効薬投与のために90何人からお金をいただくのではなく、平凡な、とはいえ立派な基準を皆が超えるようにケアするのが「全カリ」の務めだろう。

こばやし じゅん（言語教育科目担当部会長，経済学部教授）